

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第202集

飯能市

中台遺跡

一般国道299号関係埋蔵文化財発掘調査報告

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



中台遺跡・航空写真



中台遺跡・出土石器

序

埼玉県では「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念として、6つの基本施策に沿い県政を進めております。

道路や交通網の整備は、その2つめの施策として、新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくりに基づき進められているものです。

一般国道299号の整備は、県民の豊かな生活を支え、県内の地域間連携を高めるため県内一時間道路網構想の一環、東西方向の国道整備のひとつとして計画されたものです。

ところで、飯能市は、旧石器時代以降数多くの遺跡が存在することで知られておりますが、市東部にあたる双柳地域も例外ではなく、整備予定地においても埋蔵文化財の所在が確認されておりました。これらの遺跡の取り扱いについて、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることになりました。当事業団では、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、発掘調査を実施いたしまし

た。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器集中箇所、縄文時代及び中・近世の遺構や遺物など貴重な資料が見つかっております。

本書は、これらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護および普及・啓発、学術研究の基礎資料、教育機関の参考資料として広く御活用いただけることを願ってやみません。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県土木部道路建設課、飯能土木事務所、飯能市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、飯能市に所在する中台遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。

中台遺跡 (NKDI)

飯能市大字及柳子上通台1317-3番地

平成7年8月17日付け教文第2-80号

3. 発掘調査は、一般国道299号建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については小野美代子、山川守男が担当し、平成7年7月1日から平成7年8月31日まで実施した。整理報告書作成事業は小野が担当し、平成10年1月1日から平成10年3月31日

まで実施した。

5. 遺跡の基準点測量及び航空写真は、中央航空株式会社、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。

6. 発掘調査時の遺構写真撮影は小野、山川が行い、遺物の写真撮影は小野が行った。

7. 出土品の整理及び図版の作成は小野が行った。

本書の執筆は、I-1を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が、IV-1-遺物説明を小林あいりが、それ以外は小野が行った。

8. 本書の編集は、小野があたった。

9. 本書にかかる資料は平成10年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

10. 本書の作成に当たり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
谷口康浩、曾根原裕明、飯能市教育委員会

凡例

1. 遺構全体図のX・Y座標による表示は国家標準直角座標第Ⅱ系に基づく座標値を示し、方位はすべて座標北を表す。

2. 縮尺は全測図を1:500、遺構図及び遺物分布図を1:60で示し、旧石器及び剥片を2:3、縄文土器拓影図及び、その他の遺物を1:3で示した。例外については挿入中に示した。

3. 全体図等に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ=建物跡 SX=竪穴状遺構 SK=土廣
SD=溝

4. 遺構の名称は原則として調査時の名称を使用した。遺構名称を変更したものは、以下のとおりである。

SJ4~7⇒SX1~4

目次

口絵
序
例言
凡例

I 調査の概要	1	(2) 建物跡	21
1 調査に至る経過	1	(3) 土壌	23
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	(4) 遺物	25
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	3 その他の遺構と遺物	25
II 立地と環境	4	(1) 堅穴状遺構	25
III 遺跡の概要	8	(2) 土壌	26
IV 遺構と遺物	11	(3) 溝	27
1 旧石器時代の遺構と遺物	11	(4) 中・近世の遺物	28
(1) 概略	11	V 結語	30
(2) 石器集中	11	1 旧石器について	30
2 縄文時代の遺構と遺物	21	2 縄文土器について	31
(1) 概略	21		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第13図 第4石器集中出土石器	20
第2図 周辺の遺跡	5	第14図 1号建物跡	21
第3図 遺跡位置図	7	第15図 2号建物跡	22
第4図 基本土層図	8	第16図 3号建物跡	23
第5図 遺構全体図	9・10	第17図 1～6号・11～13号土旗	24
第6図 第1石器集中	12	第18図 縄文土器	25
第7図 第1石器集中出土石器	13	第19図 1号・2号堅穴状遺構	26
第8図 第2石器集中	14	第20図 3号・4号堅穴状遺構	27
第9図 第2石器集中出土石器	15	第21図 7～10号・14号土壌	28
第10図 第3石器集中・単独出土石器	16	第22図 1号溝	29
第11図 第3石器集中および単独出土石器	17・18	第23図 中・近世の遺物	29
第12図 第4石器集中	19	第24図 中台遺跡 柱状図	30

表目次

第1表 第1石器集中 石器一覧……………13	第3表 第3石器集中・単独出土石器 石器一覧……………16
第2表 第2石器集中 石器一覧……………15	第4表 第4石器集中 石器一覧……………20

図版目次

図版1 遺跡遠景(航空写真)	図版9 4号土壌(南西より) 5号・6号土壌(南より)
図版2 遺跡全景(東より) 遺跡近景(西より)	図版10 11号・12号土壌(南東より) 13号土壌(南より)
図版3 遺跡近景(東より) 基本土層断面	図版11 1号・2号竪穴状遺構(東より) 3号・4号竪穴状遺構(東より)
図版4 第1・第2・第3石器集中 第1・第2石器集中	図版12 7号土壌(南より) 8号・9号・10号土壌(南より)
図版5 第4石器集中 ナイフ形石器出土状況(H-8)	図版13 14号土壌(西より) 1号溝(西より)
図版6 ナイフ形石器出土状況(I-9) 大型剥片出土状況(J-13)	図版14 1号溝(南西より) 1号溝(東より)
図版7 1号建物跡(南より) 2号建物跡(西より)	図版15 旧石器
図版8 3号建物跡(南西より) 1号・2号・3号土壌(南より)	図版16 縄文土器
	図版17 近世陶器

I 調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県は、多様化する県民の生活圏の拡大に対応し、また高度化する産業活動の円滑化などを図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視しながら、県内1時間道路網構想を目指した道路網の整備を推進している。国道の整備については、地域高規格道路の導入整備を進めるほか、バイパス整備などによる4車線化及び東西方向の国道の強化などが図られている。一般国道299号飯能伏山バイパス建設事業は、このような構想のもとに計画された。

埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課では、こうした各種の開発事業に対応すべく、開発部局と事前協議を重ね、文化財保護と開発事業との調整を図っているところである。

本道路事業にかかる埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについては、埼玉県土木部道路建設課長より県教育庁生涯学習部文化財保護課長あて、平成5年9月28日付け道建第268号で照会があった。これに対し文化財保護課では、平成6年11月16日に埋蔵文化財の範囲確認調査を現地で実施し、その結果に基づき次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	中台遺跡(21-008)
種別	集落跡
時代	縄文・奈良・平安時代
所在地	飯能市双柳字上ノ台1317--3番地他

(文化財保護課)

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

その後の協議で、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、平成7年度に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の実施については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、道路建設課、文化財保護課の三者により協議が行なわれた結果、平成7年6月1日から2ヶ月間の予定で着手することになり、道路建設課において調査に要する経費が予算措置された。

発掘調査に先立ち、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく発掘通知が、埼玉県知事から提出され、また、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からは、同法57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出された。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次の通りである。

平成7年8月17日付け 教文第2-80号

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成7年7月1日から8月31日までの2か月間にわたり中台遺跡の第二次調査を実施した。

6月中旬 現地に於いて、県土木部道路建設課担当者と当事業団当事者が、調査及び安全対策などについて打ち合わせを行う。調査区が吹く仮設事務所の設置箇所がなかったため、事務所用地は道路建設予定地内の原有地を使用することになる。6月下旬仮設事務所を器材を搬入する。

7月上旬より重機による表土の掘削と遺構の確認を開始する。並行して補助員の募集を行う。7月7日より補助員を導入し、遺構の確認調査に入る。表土の量が多く、排土置き場の確保が困難であったため、調査予定地内の西側および東側地点に試掘トレンチを設定し、遺構が検出されなかった部分を排土置き場として利用する。

7月中旬掘削終了。調査区は2ヶ所に分かれており、便宜的に北側をA区、南側をB区とした。A区からは第一次調査の際に検出された近世の溝遺構が検出された。またB区からは、旧石器時代の石器集中や縄文時代の建物跡などが検出されている。A区は、ほぼ平坦な地形で、表土の深さは約50cmほどになる。B区は調査区の中心に南側から谷が入っており、谷の部分の表土の深さは1mを越える。これと並行してA区は溝の精査を行う。

7月下旬に基準点測量及び、方眼杭の設置を行う。遺構写真の撮影を行う。

8月上旬 縄文時代以降の遺構精査をほぼ終了し、旧石器時代の確認作業に入る。旧石器時代の遺物は、B区の縄文時代の建物跡の床面からすでに検出されており、遺物の出土範囲を確認する方向で確認調査を行う。この結果、四ヶ所の石器集中が確認できた。

8月中旬 旧石器の確認調査と並行して基本土層図を作成する。旧石器時代遺物の出土状況写真の撮影を行う。旧石器時代の遺物の取り上げを開始する。これらと並行して遺構の全測図および地形図の作成を行う。航空写真の撮影を行う。

8月下旬 旧石器時代の調査をほぼ終了する。全景写真撮影のための清掃を行い、写真撮影終了。記録類の作成をすべて終了する。発掘調査の全行程が終了する。調査区の埋め戻しを行う。器材等を搬出し、現場事務所の撤去作業を行う。

整理作業

平成10年1月1日から平成10年3月31日までの3か月間にわたり、中台遺跡の報告書作成のための作業を実施した。

1月 出土遺物の注記・接合作業を行う。これと並行して発掘調査時に作成した図面及び遺構写真の整理を行い、遺構の第二原因の作成に入る。また、これらと並行して遺物の実測図作成に入る。遺構写真の割り付け終了。

2月 遺構の版組を行い、トレースに取りかかる。遺物の拓本取り終了。遺物の写真撮影を行う。遺物の実測図及びトレースが終了する。遺構図のトレースも終了する。地形図等を作成し、原稿の執筆に入る。報告書の割り付け作業開始。

3月 原稿執筆及び写真図版の作成をする。割付作業をほぼ終了する。巻頭カラー写真の委託撮影を行う。版下の最終チェックをする。原稿執筆終了。入稿する。遺物及び原因、写真ネガ等の記録類の整理を行い、保管場所に移動する。入稿後校正作業を行い、平成10年3月付けで報告書を刊行する。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成7年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 古川 國男
常務理事 新井 秀直
兼管理部長 理 事
兼調査部長 小川 良祐

管理部

庶務課長 及川 孝之
主 査 市川 有三
主 任 長滝 美智子
主 事 菊池 久

専門調査員

兼経理課長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫
調査第二課長 大和 修
主 査 小野 美代子
主任調査員 山川 守男

(2) 整理事業 (平成9年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 塩野 博
常務理事 稲葉 文夫
兼管理部長 理 事
兼調査部長 梅沢 太久夫

管理部

庶務課長 依田 透
主 査 西沢 信行
主 任 長滝 美智子
主 任 腰塚 雄二

専門調査員

兼経理課長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 任 福田 昭美
主 任 菊池 久

資料部

資料部長 谷井 彪
主 幹 小久保 徹
兼資料部副部長 専門調査員
兼資料整理第一課長 坂野 和信
主 査 小野 美代子

II 立地と環境

飯能市域は、入間台地の西部から高麗丘陵・加治丘陵、外秩父山地にまたがっており、市内には、高麗川、入間川、南小畔川などの河川が、ほぼ西から東に流れている。市域にはこれらの河川の流域を中心に各時代の遺跡が多く分布している。

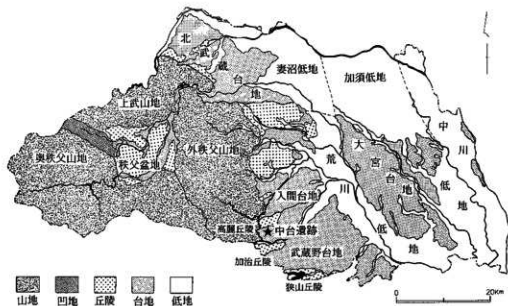
中台遺跡(1)は、飯能市の南東部、J R飯能駅の北西約2kmの所に位置している。本遺跡が立地している入間台地は、入間川を挟んで武蔵野台地と対峙し、台地の北側は越辺川によって比企丘陵と区切られている。入間台地の西側は外秩父山地に接しており、飯能市域と日高市域の間には高麗丘陵が横たわっている。入間台地はさらに、毛呂台地・坂戸台地・飯能台地に区分される。飯能台地は入間川の古い扇状地として形成されたもので、上位・中位・下位の三つの段丘面に分かれる。入間台地を流れる河川は、いずれも外秩父山地や高麗丘陵に源流を持ち、これらの河川は一度北東方向へ流れ、さらに南流して越辺川や入間川に合流する。

中台遺跡の立地する台地の北側は、小支谷が入り込んでおり、屋敷遺跡(3)が立地する台地と隔てられ

ている。また、本遺跡の南側には、遺跡の立地する台地よりも標高の低い段丘面が広がっており、緩い斜面を形成している。しかし、斜面下には河川が無く、遺跡の分布は希薄になっている。今回の調査地点は、段丘斜面にかかる台地の縁辺部に相当し、遺跡の平坦部からは旧石器時代の石器集目が、また、東西に長い調査区の中央に南から入り込んだ浅い谷の部分からは、縄文時代およびそれ以降の遺構が検出されている。

中台遺跡は南小畔川流域沿いに分布する遺跡のひとつで、今回の調査では、後期旧石器時代、縄文時代早期および中・近世の資料が出土している。また、第一次調査の際には、後期旧石器時代の石器集中および縄文時代後期の土壌などが検出されている。南小畔川沿いの遺跡を西の方から見てくると中台遺跡の北側約300mには栗屋遺跡、さらに栗屋遺跡の北側約300mには栗屋遺跡(4)が存在する。栗屋遺跡は、旧石器時代を主体とする遺跡で、チャートを主体とする後期旧石器時代の石器集中が見つかった。栗屋遺跡からは、縄文時代中期加曾利E式期の土器片および何時代の土壌が検出されている。さらに中台遺跡の北西約

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



- 1中台遺跡 2家前遺跡 3屋河遺跡 4栗根2号遺跡 5株木遺跡 6引摩久遺跡 7葦の根遺跡
 8芦刈場遺跡 9半久保遺跡 10下川崎向原遺跡 11加能里遺跡 12池ノ東遺跡 (以上飯能市)
 13八木前遺跡 14八木遺跡 15八木上遺跡 16宮地遺跡 (以上狹山市) 17高麗石器時代住居跡 18平谷遺跡
 19高麗小学校庭遺跡 20東原遺跡 21小竹遺跡 22寺脇遺跡 23宿東城跡 (以上日高市)

500mには、縄文時代中期・平安時代の資料を出土する堂前遺跡(2)が存在する。これらの4遺跡から約1km北東方向には、縄文時代中期・後期、平安時代の遺跡である株木遺跡(5)、株木遺跡の東方約1.1kmには、奈良・平安時代の集落遺跡として知られる張摩久保遺跡(6)、さらに張摩久保遺跡の東方約800mには、縄文時代前期および中期の資料を出土する堂の根遺跡(7)が存在する。堂の根遺跡の東北東約700mの日高市境には、芦刈場遺跡(8)が存在する。芦刈場遺跡からは、縄文時代中期の住居跡が8軒検出されており、阿玉台式、勝坂式、加曾利E式などの土器や石鏃、石斧、石皿などが出土している。堂の根遺跡の北西約600mには、久久保遺跡(9)がある。久久保遺跡も縄文時代中期の集落跡で、勝坂式や加曾利EⅠ式・EⅡ式土器などが出土している。また、遺跡の東端からは奈良・平安時代の土器片なども見つっている。さらに、堂の根遺跡の真北約900m、久久保遺跡の北東約500mには下川崎向原遺跡(10)が存在する。下川崎向原遺跡は日高市境にあり、一部日高市域まで遺跡が延びている。縄文時代中期の遺跡で勝坂式や加曾利E式土器を出土する。以上が南小畔川沿いに分布する遺跡であるが、中位段丘面に分布する中台遺跡や屋淵遺跡を除くと大半が縄文時代中期、もしくは奈良・平安時代の遺跡であることがわかる。

飯能市域の入間川左岸の遺跡としては、縄文時代各時期にわたる大遺跡である加能里遺跡(11)や縄文時代中・後期の池ノ東遺跡(12)をあげることができる。加能里遺跡は、十数次にわたる調査が行われ、縄文時代草創期の爪形文土器、早期の燃糸文土器、中期の加曾利E式、後期の称名寺・堀之内・加曾利Bの各式の資料が出土しており、加曾利EⅢ式期の敷石住居跡なども検出されている。また、中期から晩期にかけての住居跡も多数見つっている。池ノ東遺跡は、加能里遺跡の北東に隣接する遺跡で、縄文時代早期の条痕文系土器と加曾利EⅡ式土器を出土する。1984年の調査では加曾利EⅡ式期の住居跡が検出されている。

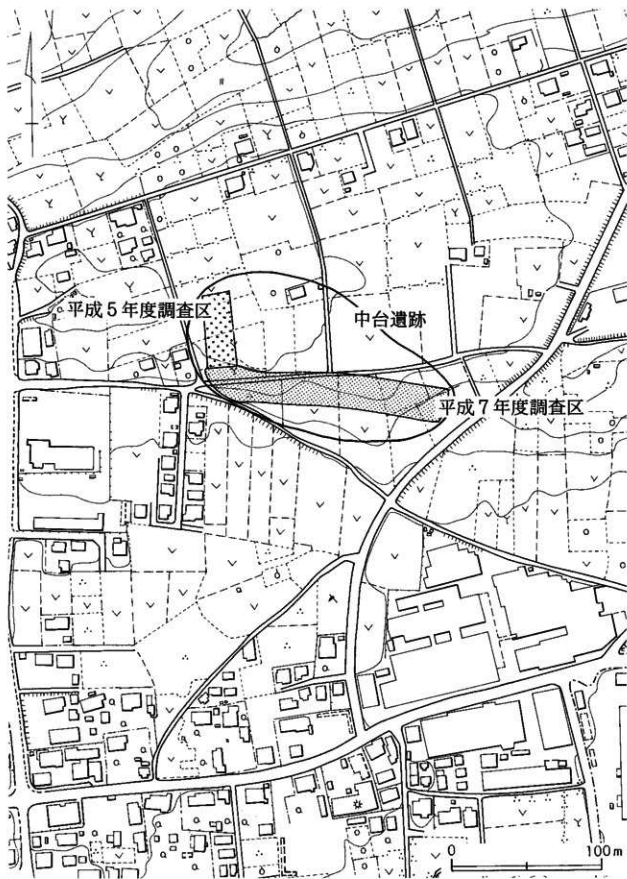
入間川下流にあたる狭山市域では、八木前遺跡(13)、

八木遺跡(14)、八木上遺跡(15)、宮地遺跡(16)などが見られる。八木前遺跡からは、縄文時代前期および後期の遺物や土壌、八木遺跡からは、縄文時代前期・中期の住居跡や土壌、奈良・平安時代の遺物などが検出されている。八木上遺跡からは、縄文時代前期の住居跡や土壌および前期末の土器が多量に検出されている。また、宮地遺跡は、縄文時代中期の集落跡として知られているが、旧石器時代の遺物も採集されている。

次に高麗川流域の遺跡を見ていきたい。高麗川は、南小畔川よりも4kmほど北方を流れており、この流域の遺跡はいずれも日高市域に存在する。高麗川流域の遺跡を西の方から概観していくと、高麗石器時代住居跡(17)、平谷遺跡(18)、高麗小学校校庭遺跡(19)などが見られる。高麗石器時代住居跡は、昭和4年に調査された著名な遺跡で、縄文時代中期加曾利E式の住居跡が検出されている。高麗小学校校庭遺跡からも縄文時代中期加曾利E式の住居跡が、平谷遺跡からは、縄文時代中期勝坂式・加曾利E式、後期堀之内式などの資料が出土している。高麗小学校校庭遺跡の北東約1kmには東原遺跡(20)があり、縄文時代中期加曾利E式、後期堀之内Ⅱ式などが出土している。その東方約400mには小竹遺跡(21)がある。同遺跡からは縄文時代中期の他に、近世の土塚墓が検出されている。小畔川流域には寺臨遺跡(22)、宿東遺跡(23)などの縄文時代中期後半から中期末にかけての遺跡が分布する。特に、宿東遺跡は数次にわたって調査が行われており、縄文時代中期後半から後期前葉の住居跡や土壌が多数検出されている。また、遺物は、中期加曾利EⅡ式～EⅣ式土器、後期堀之内式土器、石鏃、石斧、垂飾などが出土している。

今回、中台遺跡の調査では旧石器時代の石器集中と縄文時代早期末の条痕文系土器が出土しているが、周辺の遺跡は縄文時代中期から後期にかけてのものが圧倒的に多く、中台遺跡の北側の屋淵遺跡で旧石器時代の石器集中が、また南方1.5kmの池の東遺跡で条痕文系土器が出土しているにとどまる。

第3図 遺跡位置図



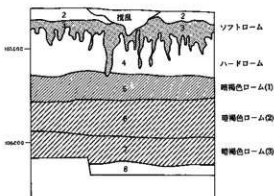
Ⅲ 遺跡の概要

今回の調査は、一般国道299号建設に伴うもので、ちょうど南北に延びる県道飯能寄居線と東西に延びる国道299号が交差する地点を調査した。今回の中台遺跡の調査は第二次調査にあたる。第一次調査は、県道飯能寄居線の建設工事に伴うもので、今回の調査区の北側約1,100㎡の調査を平成5年度に実施している(第3図参照)。

第一次調査では、旧石器時代の石器集中、縄文時代の土壌、近世以降の溝や土壌などが検出されている。旧石器時代の遺物はハードローム層中から約20点検出されている。いずれもチャートの剥片と破片でTOOLは含まれていない。縄文時代の遺構は土壌が5基検出されているが、1号土壌からは、縄文時代後期の深鉢が1点出土している。その他、近世の溝跡や土壌が検出されているが、近世の溝跡の続きが今回の調査でも検出されている。

中台遺跡は、入間川によって形成された飯能台地上に位置する。飯能台地の北半は下末吉面に対比される上位段丘となっており、北縁には南小野川などによる開折谷が発達している。このため、これに臨む斜面には縄文時代や奈良・平安時代の遺跡が多数存在している。これに対して、中台遺跡は段丘の南側斜面にあり、斜面下には河川が無いので、周辺は遺跡の分布が希薄になっている。

第4図 基本土層図



中台遺跡は台地の平坦部を中心に広がっているが、今回の調査区の人半は、台地の縁辺部にかかっている。このため、東西に延びる調査区の中央に南側から浅い谷が入り込んでおり、この谷の部分から縄文時代の遺構などが検出されている。

調査区は市道を挟んで二箇所に分かれるため、便宜的に市道の北側をA区、市道の南側をB区とした(第5図参照)。調査は座標軸に則り、10mピッチのグリッドを設定して行った。標高はA区で約108.40m、B区の平坦面で約107.80mになる。

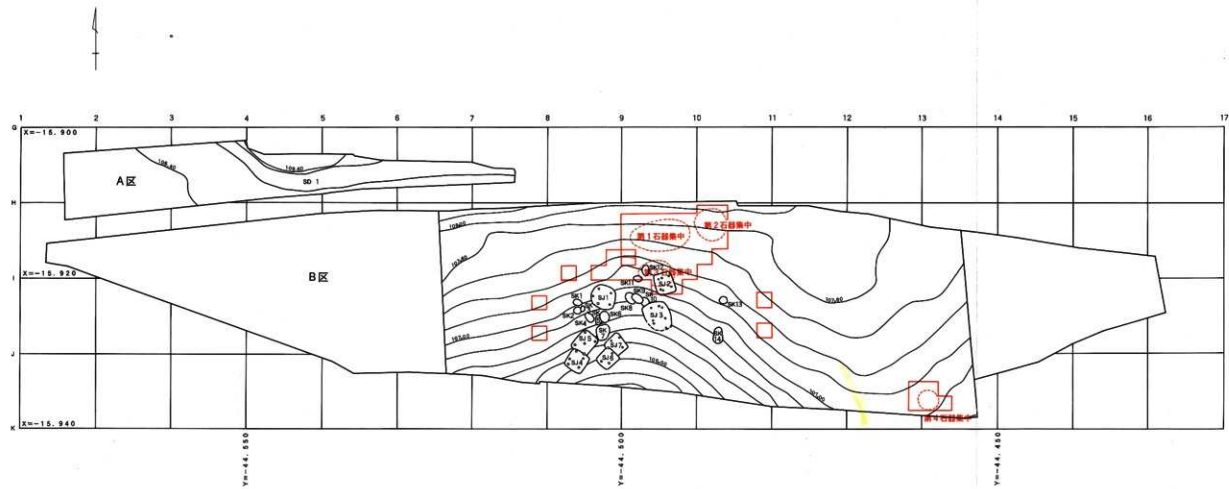
調査の結果、旧石器時代の石器集中4か所、縄文時代の建物跡3棟、土壌9基、土器集中1か所、中世以降の建物跡4棟、土壌4基(以上B区)、近世の溝跡1条(A区)などが検出された。

旧石器時代の石器集中は、いずれも台地縁辺部のソフトローム層中より検出されている。谷の最奥部周辺で3か所、谷の東側で1か所、合計4か所の石器集中が見られたが、谷の最奥部の石器集中は、チャートや頁岩、ホルンフェルス、メノウなどで構成されるのに対し、谷の東側で見られた石器集中は、1点のガラス質黒色安山岩以外はすべて黒曜石で構成されている。逆に谷の最奥部より検出された石器集中からは黒曜石の剥片は見つかっておらず、第3石器集中としたTOOLを含む密度の薄い集中から黒曜石製のナイフ形石器が1点出土しているのみである。

縄文時代の遺構は建物跡と思われる遺構が3棟検出されたが、基礎は確認できず、住居跡というよりはキャンプ小屋のようなものと考えられる。土壌は9基検出されたが、遺物の出土はほとんど無かった。また、調査区の南側の際からは縄文時代早期末の土器片が数点纏まって出土している。

近世の溝跡は、A区より検出された。第一次調査の際に検出された溝の続きと考えられる。覆土中からは明治時代以降の陶磁器も出土している。他には、須恵器片、近世陶器片、砥石などが出土している。

第5图 遺構全体图



IV 遺構と遺物

1. 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 概略

旧石器時代の石器集中は、全部で4箇所検出されている(第5図)。単発出土の石器も含め、全てB区からの出土である。平成5年度の第一次調査地点(第3図参照)からも剥片が十数点出土しているが、これに隣接するA区では、旧石器時代の遺物は検出されなかった。

旧石器時代の石器集中は、台地の平坦部から肩部にかかる標高約107.00m~108.00mの範囲で検出されている。出土層位は、ほとんどが第3層(ソフトローム)から出土している(第4図参照)。

石器集中は大きくH-9・10G周辺とJ-13G周辺の2地点に分かれ、H-9・10G周辺の集中は、さらに3つの集中に分けることが可能である。

それぞれの位置関係は、第5図に示すとおりである。第1石器集中はH-9Gの北西よりに存在し、その南側のH-I-9Gに第3石器集中、そして、第1石器集中の東側、H-9G北東寄りからH-10Gにかけて第2石器集中が見られる。これらの石器集中は、いずれもチャートと頁岩で構成されており、互いに関連を持つまとまりと考えられる。

H-8Gからは、チャート製のナイフ形石器が単独で出土している。

第4石器集中は、第2石器集中から約38m南東方向に離れた地点、J-12Gの東壁寄りからJ-13Gにかけて存在する。この第4石器集中は、他の石器集中とは異なり、1点のガラス質安山岩を含む黒曜石群で構成されている。

この第1から第3の石器集中と第4石器集中は、出土層位からは時期的な差は、ほとんど無いと考えられる。したがって、この石材の相違は、集団の違いによるものと考えられるべきなのであろうか。

当遺跡においては、チャートは石材として一般的な素材であったと考えられ、第1から第3の各集中にお

いても、それぞれ高い率を示している。平成5年度の調査においても、検出された石器集中の石材は、すべてチャートであった。

(2) 石器集中

第1石器集中(第6図 図版4)

第1石器集中はH-9Gの北西寄りから検出された。すぐ東側には、第2石器集中が存在する。第1石器集中からはTOOLは検出されておらず、9点の剥片と2点の焼燥から構成される。第1石器集中の剥片の石材は、黒色頁岩が約45%、チャートが約33%、メノウが約22%で、黒色頁岩がほぼ半数を占める。

また、H-9GN6(第6図)の剥片は、第2石器集中のH-9GN13(第8図)の剥片と同一石材である可能性が高く、互いの集中の関連がうかがえる。

第6図の断面はH-9Gの西壁ラインに投影したものである。石器および剥片は、3を除き、いずれもローム新移層およびソフトローム層中から検出されている。3はハードローム層中から出土している。21は、攪乱層に投影されてしまったが、実際はソフトローム層中から出土している。

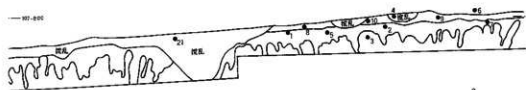
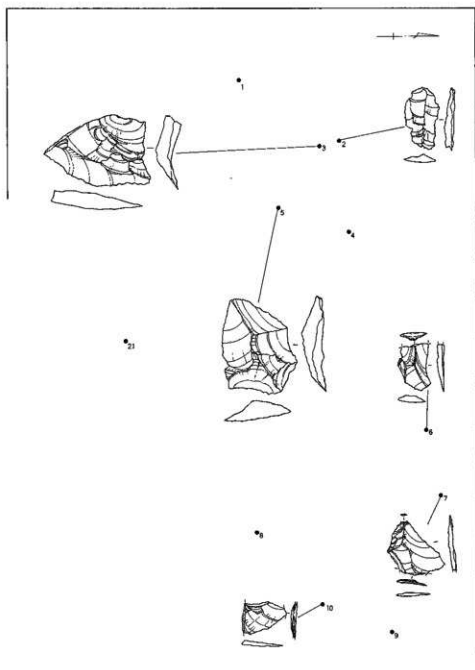
第1石器集中の遺物は、標高107.59m~107.88mのごく限られた範囲から検出されている。

遺物(第7図 図版15)

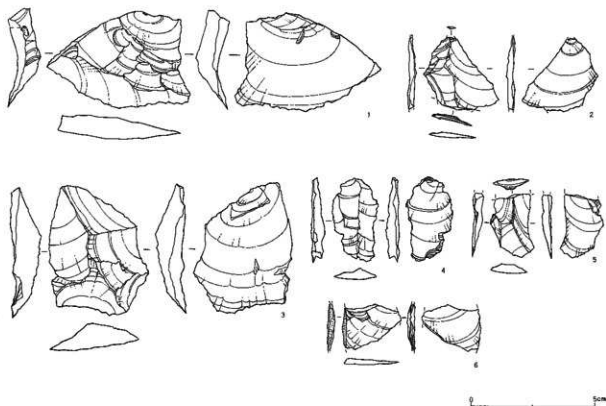
第1石器集中からの出土遺物は、すべて剥片である。第7図-1は、主要剥離面に打点が残っている。強い反りを持っている。2は、打点がわずかに残る。3は、やや人型の剥片で、背面側に打点がわずかに残っている。4は、打点が剥離により取り除かれており、残っていない。石材は乳白色で内部に赤褐色の部分が透けて見えており、メノウと思われる。5は、黒色頁岩の剥片で、第9図5(第2石器集中)の剥片と同一石材の可能性が高い。打点は残っていない。6は、左側縁に自然面が残っている。他の部分は、折断により欠損している。

第6図 第1石器集中

10
10
10



第7図 第1石器集中出土石器



第1表 第1石器集中 石器一覧

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考
1	H-9	3.53	0.76	107.65	剥片	1.10	1.40	0.15	0.2	黒色頁岩		
2	H-9	2.47	1.40	107.71	剥片	3.25	1.85	0.50	2.13	メノウ	図7-4	
3	H-9	2.67	1.45	107.60	剥片	3.90	5.75	1.30	17.5	チャート	図7-1	
4	H-9	2.37	2.36	107.81								焼燻
5	H-9	3.12	2.10	107.65	剥片	5.15	4.00	1.20	18.22	チャート	図7-3	
6	H-9	1.55	4.45	107.88	剥片	(2.5)	1.75	0.40	1.59	黒色頁岩	図7-5	
7	H-9	1.39	5.13	107.77	剥片	(2.85)	3.05	0.30	2.06	黒色頁岩	図7-2	
8	H-9	3.35	5.51	107.71	剥片	(1.15)	1.70	0.20	0.3	黒色頁岩		
9	H-9	1.93	6.58	107.81								焼燻
10	H-9	2.67	6.28	107.78	剥片	(1.75)	2.30	0.30	1.41	チャート	図7-6	
21	H-9	4.73	3.50	107.59	剥片	(2.05)	1.55	0.25	0.82	メノウ		

第2石器集中 (第8図 図版4)

第2石器集中はH-9・10Gから検出された。第2石器集中は、他の集中に比べ集中度が高く、スクレイパー1点、剥片30点、焼燻2点の合計33点が、ほぼ7メートル四方に分布している。TOOLは1点しか検出されなかった。第2石器集中の石材は、チャートが約44%、黒色頁岩が約33%、メノウが約23%になる(第2表参照)。第2石器集中は、第1石器集中と同じく、チャートと黒色頁岩、メノウで構成されるが、第2石器集中においては、チャートと黒色頁岩の割合が第1石器集中とは逆転している。

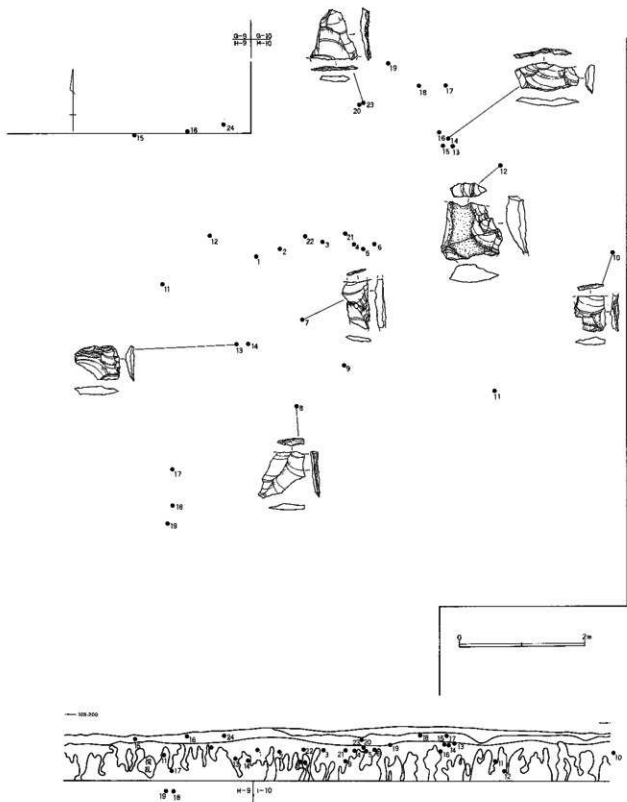
また、H-9No13(第8図)とH-9No6(第6図)

剥片は、同一石材である可能性が高く、二つの石器集中が互いに関連していたことがわかる。

第8図の断面はH-9・10G北壁より南に2mの東西ラインに投影したものである。石器および剥片の出土層位は、いずれもローム漸移層およびソフトローム層中である。H-9-18・19が断面図下に入ってしまうのは、調査区が南に向かって斜面になっているためである。実際はソフトローム層中から出土している。標高は107.42m~108.06mの範囲から検出されているが、ほぼ107.80m付近に集中する。

TOOLとしては、メノウ製のスクレイパー(第8図23)が1点出土している。

第8图 第2石器集中



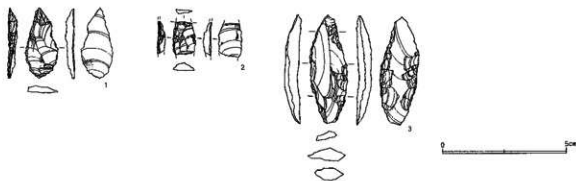
第9図 第2石器集中出土石器



第2表 第2石器集中 石器一覧

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考
11	H-9	2.60	9.04	107.76	剥片	(3.0)	(1.2)	(0.3)	1.35	メノウ		
12	H-9	2.90	9.56	107.89	剥片	(1.15)	1.15	0.10	0.17	メノウ		
13	H-9	3.23	9.82	107.76	剥片	1.80	2.45	0.45	1.91	黒色頁岩	図9-5	
14	H-9	3.22	9.97	107.45	剥片	2.30	(0.85)	0.20	0.46	メノウ?		
15	H-9	1.02	8.76	107.99	剥片	(1.9)	(1.7)	0.50	0.94	チャート		
16	H-9	1.00	9.31	108.00	剥片	1.25	1.65	0.40	0.74	チャート		
17	H-9	4.55	9.16	107.63	剥片	1.70	0.90	0.55	0.87	チャート		
18	H-9	4.93	9.15	107.43								
19	H-9	5.12	9.10	107.42	剥片	(2.0)	(2.3)	0.55	2.90	チャート		焼燻
24	H-9	0.91	9.70	108.01	剥片	(1.8)	1.30	0.75	1.82	チャート		
1	H-10	2.31	0.06	107.87	剥片	1.35	1.05	0.20	0.17	黒色頁岩		
2	H-10	2.24	0.30	107.87	剥片	(2.2)	(0.85)	(0.5)	0.78	メノウ		
3	H-10	2.15	0.76	107.88	剥片	(0.8)	(0.55)	0.10	0.06	黒色頁岩		
4	H-10	2.18	1.10	107.88	剥片	(1.20)	1.20	(0.25)	0.41	黒色頁岩		
5	H-10	2.22	1.20	107.88								
6	H-10	2.16	1.32	107.89	剥片	(0.85)	(1.10)	0.25	0.22	メノウ		
7	H-10	2.98	0.55	107.74	剥片	2.50	1.40	(0.45)	1.48	メノウ	図9-2	
8	H-10	3.88	0.50	107.75	剥片	2.40	2.50	0.40	1.80	チャート	図9-3	
9	H-10	3.44	1.00	107.74	剥片	1.50	1.90	0.15	0.60	黒色頁岩		
10	H-10	3.27	3.84	107.91	剥片	(1.85)	(1.6)	0.6	1.42	メノウ	図9-6	
11	H-10	3.72	2.60	107.78	剥片	3.10	2.10	0.35	2.27	チャート		
12	H-10	1.36	2.66	107.69	剥片	(3.05)	(3.3)	(1.05)	9.80	チャート	図9-7	
13	H-10	1.15	2.14	107.96	剥片	(1.45)	(1.90)	0.35	0.71	チャート		
14	H-10	1.07	2.08	107.95	剥片	1.50	3.45	0.50	2.23	黒色頁岩	図9-4	
15	H-10	1.14	2.04	107.96	剥片	(1.3)	(1.8)	0.45	1.06	チャート		
16	H-10	1.00	2.00	107.89	剥片	1.40	1.30	0.20	0.31	黒色頁岩		
17	H-10	0.50	2.07	108.06	剥片	2.05	3.55	0.35	2.62	チャート		
18	H-10	0.50	1.78	108.06	剥片	(1.70)	1.90	0.20	0.50	黒色頁岩		
19	H-10	0.28	1.46	107.94	剥片	1.20	1.95	0.20	0.36	黒色頁岩		
20	H-10	0.70	1.16	108.00	剥片	(1.25)	1.80	0.30	0.54	黒色頁岩		
21	H-10	2.07	1.00	107.88	剥片	1.20	(0.90)	0.30	0.30	チャート		
22	H-10	2.10	0.58	107.87	剥片	0.70	1.05	0.10	0.07	チャート		
23	H-10	0.70	1.17	107.90	スレイパー	(2.7)	(2.5)	(0.45)	2.67	メノウ	図9-1	

第10図 第3石器集中・単独出土石器



第3表 第3石器集中 単独出土石器 石器一覧

番号	グリッド	北一南(cm)	西一東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考
1	H-8	9.36	6.52	107.32	ナイフ	2.80	1.30	0.4	1.25	チャート	図10-1	
26	H-9	9.34	0.00	107.05								焼礫
20	H-9	6.75	5.57	107.35	剥片	(2.0)	2.10	0.20	0.62	黒色頁岩		
22	H-9	6.64	3.61	107.29	ナイフ	(1.3)	0.90	(0.3)	0.45	チャート	図10-2	焼礫
23	H-9	7.16	3.94	107.97								
25	H-9	8.03	6.65	107.35	剥片	(1.1)	0.55	0.20	0.15	チャート		
27	H-9	9.75	5.17	107.03	剥片	2.00	1.70	0.30	1.04	チャート		
28	H-9	9.60	5.60	107.04	剥片	2.30	1.80	0.30	1.32	チャート		
1	I-9	0.07	6.38	107.06	尖頭器	4.30	1.50	0.60	3.52	チャート	図10-3	

遺物 (第9図 図版15)

第9図-1は、スクレイパーである。下部が折損している。縦長剥片を、打点を上にして使用しており、主要剥離面側に刃部が作り出されている。刃部の加工は、右側縁に背面側からの剥離で行われている。特に中央部分は、非常に細かな調整加工がほとんどこされておき、やや抉りを持つ。これに対し、左側縁は、表面からの折断を意図的に行って整形されている。下部の折損は、背面からの折断によるものと考えられる。石材は、質の悪いメノウである。

9図2～7は、いずれも剥片である。2は、メノウの薄型の剥片である。3はチャートの剥片である。4は、黒色頁岩製の横長剥片である。5も黒色頁岩の剥片で、上部に打点が残っており、打面調整の痕が見られる。この剥片は、第1石器集中の剥片(第7図-5)と同一石材である。6はメノウの剥片、7は、やや大型のチャートの剥片である。

第3石器集中・単独出土石器

(第11図 図版4上・5下・6上)

第3石器集中はH・I-9Gから検出された。第3石器集中は、他の集中に比べ広範囲にわたっており、石器の分布もまばらである。また、TOOLの含有率が高いのも他の集中と異なる。合計7点のTOOLや剥片、

焼礫が出土している。これに、集中から約7.5m西にそれてH-8・9Gの境界から出土している焼礫(H-9No26)、この剥片よりさらに5mほど西側から単独で出土しているナイフ形石器(H-8No1)を加えると、合計9点になる。第3石器集中の石材はチャートが83%を占める(第3表参照)。他は、黒色頁岩製の剥片(H-9No20)が1点混じるが、かなり小さな剥片である。他の剥片も総じて小型である。

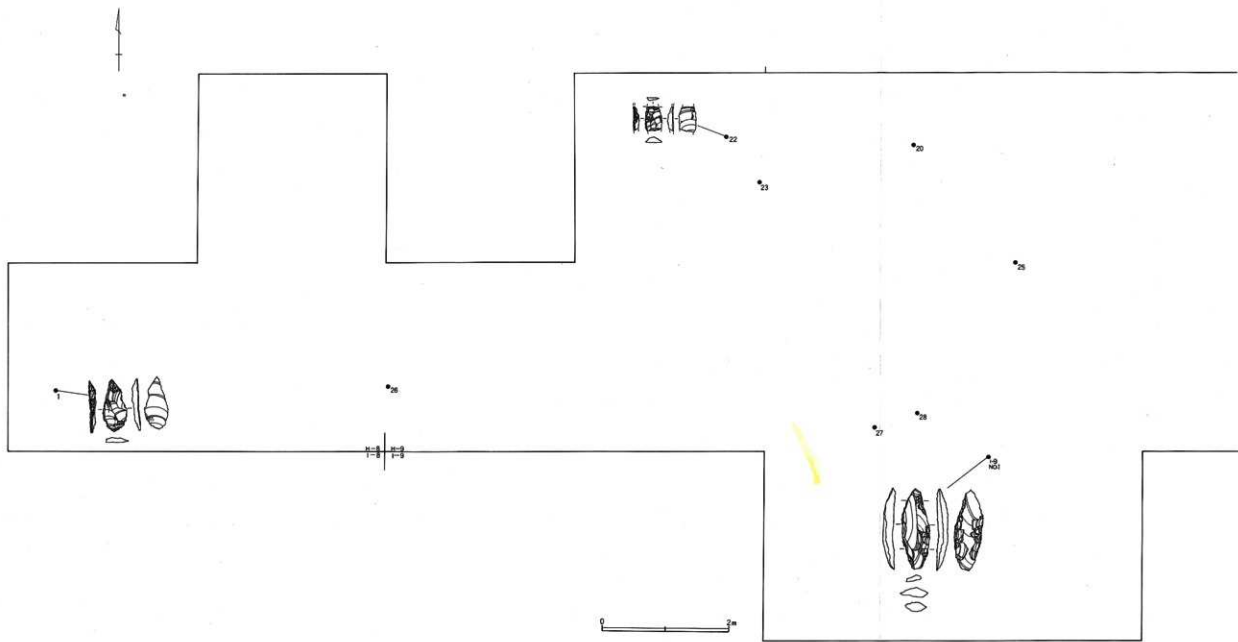
H-8G出土のナイフ形石器の石材は、チャートが用いられている。

第13図の断面はH・I-9G西壁より東に4mの南北ラインに投影したものである。石器および剥片の出土層位は、いずれもソフトローム層中である。H-9No20は複乱層の中に投影されてしまったが、実際はソフトローム層中から出土している。なお、H-8Gのナイフ形石器もソフトローム層中から出土している。標高107.03m～107.35mの範囲から検出されている。

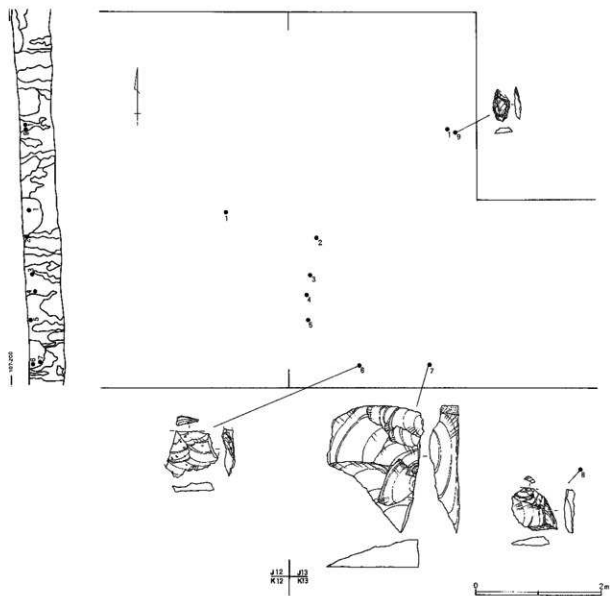
TOOLは、チャート製のナイフ形石器(H-9No22)、と尖頭器(H-9No1)が各1点出土している。

H-8Gからは、チャート製のナイフ形石器が出土している。標高は107.32mで、ソフトローム層中からの検出である。

— 1:100 —



第12図 第4石器集中



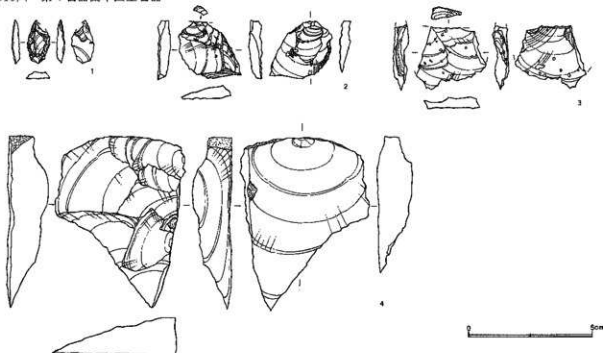
遺物 (第10図 図版15)

第10図1は、単独出土のナイフ形石器である。完形品である。縦長剥片の打点方向を基部に使用している。調整加工は、左側縁に顕著で、特に中央部から基部にかけて、非常に細かい調整が施されている。また、右側縁下部にもわずかに調整加工が見られる。石材は、チャートである。

第10図2は、ナイフ形石器である。先端部、基部ともに欠損している。先端部の欠損は、表側からの折断により生じたものであろう。このため、表面にも剥離痕が見られる。基部も表側からの折断により欠損している。

調整加工は、左側縁部に見られるが、比較的大きな調整を行った後、非常に細かい調整が施されている。第10図3は、柳葉形の尖頭器である。完形品である。I-9 Gの北端、S J-2の床面下部から出土している。先端部、基部ともに調整加工があまり行われていない。基部はコの字状を呈する。背面中央に石器素材が残っており、横長剥片を使用していることがわかる。表面に見られる大まかな剥離は、左側面からの剥離によるものである。背面中央部は、非常に薄い剥離により平坦に加工されている。左側縁部には、やや急角度の調整加工が施されている。2点とも石材は、チャートである。

第13図 第4石器集中出土石器



第4表 第4石器集中 石器一覧

番号	グリッド	全一横(cm)	全一重(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考
1	J-12	6.13	9.33	107.00	剥片	1.20	1.50	0.55	0.73	黒曜石		
1	J-13	5.24	1.70	107.04	剥片	0.80	1.15	0.20	0.16	黒曜石		
2	J-13	6.40	0.30	107.04	剥片	(0.45)	(0.25)	(0.25)	0.39	黒曜石		
3	J-13	6.80	0.22	106.50	剥片	(1.0)	(1.7)	(0.65)	1.02	黒曜石		
4	J-13	7.00	0.18	106.94	剥片	(1.15)	0.85	0.25	0.30	黒曜石		
5	J-13	7.28	0.20	107.01	剥片	(2.35)	(1.05)	0.70	1.09	黒曜石		
6	J-13	7.75	0.74	106.97	剥片	(2.45)	(2.8)	0.6	3.20	黒曜石	図13-3	
7	J-13	7.75	2.50	106.89	剥片	6.70	5.20	1.60	42.05	砂岩	図13-4	
8	J-13	8.86	3.10	107.17	剥片	2.25	2.50	0.55	2.49	黒曜石	図13-2	表土出土
9	J-13	5.28	1.77	107.03	ナイフ	1.75	0.90	0.30	0.50	黒色頁岩	図13-1	

第4石器集中 (第12図 第4表 図版5・6)

第4石器集中はJ-12・13Gから検出された。調査区外の表土から検出されたものも含め、合計9点のTOOLおよび剥片が出土している。石材は、1点を除きすべて黒曜石で構成されており、黒曜石の割合が9割を占める(第4表参照)。この1点はJ-13Gの調査区際より検出された大型剥片(第13図4)で、ガラス質安山岩が用いられている。当遺跡からは、一例のみの出土である。

第12図の断面はJ-12・13G境の南北ラインに投影したものである。石器および剥片の出土層位は、J-13-8を除き、いずれもソフトローム層中からである。表土からのものを除き、標高106.50m~107.04mの範囲から検出されている。

TOOLは、黒曜石製のナイフ形石器1点のみである。他の剥片の集中から北東方向に約3m離れた地点から出土している。

遺物 (第13図 図版15)

第13図-1の小型のナイフ形石器は、右先端部が折損しているが、右先端部に刃部を持つ切り出し状の石器と思われる。縦長剥片を縦に使用している。左右の側縁とも、石器の大きさに対し急角度の調整が施されている。基部は側縁のような調整加工は施されていない。石材の黒曜石には不純物が混じる。第13図2~4は、いずれも剥片である。2の背面には一部使用痕らしい細かい剥離が見られる。3の黒曜石の剥片には、気泡が多く混じる。4のガラス質安山岩の主要剥離面は自然面を使用している。石核の可能性も考えられる。

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概略

縄文時代の遺構は、建物跡が3棟と土壌が9基検出されている。縄文時代の遺構の大半は、台地の肩部から谷にかかる標高106.60m～107.20mの範囲で検出された。他には、谷の最深部、標高106.60m付近で、土器の集中地点が確認されたが、遺構の確認はできなかった。遺物は全体に少なく、建物跡や土壌などから縄文時代早期末の条痕文系土器および中期後半の土器片が数点出土している。

(2) 建物跡

建物跡としたものは、円形もしくは方形のプランを持ち、いずれも遺構確認面からの掘り込みは浅い。柱穴と思われるピットは検出されているが、配置が不規則なものもあり、いずれからも炉跡が検出されていないことなど、住居跡としての性格付けには無理があると思われる。したがって、「火」などを用いずに使用した小屋のようなものを想定し、広い意味での建物跡として捉えておきたいと思う。各遺構とも覆土には炭化物のカスが混じっており、床面直上の層には焼土や炭化物の混入が見られ

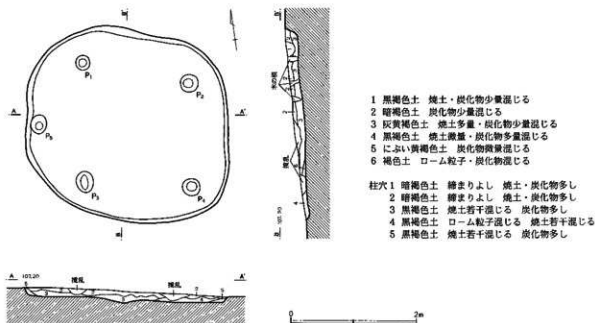
る。遺物は、1号建物跡から縄文時代中期後半の土器片が、2号建物跡からは早期末の条痕文系土器の破片が、それぞれ数点ずつ出土している。遺物量が極端に少ないのは、住居遺構ではないためと思われる。

1号建物跡 (第14図 図版7)

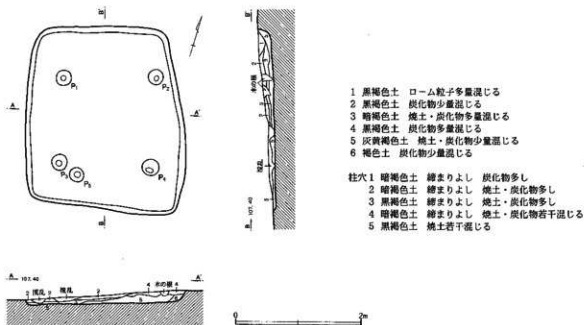
I-8 G、標高107.00m付近に位置する。プランはほぼ円形で、ピットが5本検出された。遺構の規模は約3.20m×2.97m、深さは、北壁付近で約20cmになる。床面は南東方向にやや傾斜している。5本のピットは規則的に配置されており、P1～P4は主柱穴と考えられる。西壁寄りから検出されたピットは、側柱穴と考えられる。柱穴の深さは、床面より15cm～20cmほどである。柱穴の径は、25cm～30cmである。炉跡は検出されなかったが、覆土には炭化物のカスや焼土の粒子が多く混じっており、特に、床面直上の第3層には多量の焼土粒子が混じっていた。

遺物は、縄文時代中期後半の土器片 (第18図4ほか) が数点出土している。中期の土器片は、1号建物跡以外からは見つかっていない。

第14図 1号建物跡



第15図 2号建物跡



2号建物跡 (第15図 図版7)

H・I-9 G、標高107.20m付近に位置する。プランは長方形で、ピットは5本検出された。遺構の規模は約2.90m×2.53m、深さは北壁および東壁付近で約20cmになる。床面は南にやや傾斜しているが、ほぼ水平である。P1～P4は主柱穴と思われるが、P3のすぐ横から検出されたP5の性格は不明である。柱穴の深さは、床面より18cm～25cmほどである。柱穴の径は、23cm～25cmである。1号建物跡と同じく灰跡は検出されなかったが、覆土全体に炭化物のカスが混っており、特に床面直上の層には、焼土粒子が多く混っている。

遺物は、縄文時代早期末の条痕文系土器の破片が(第18図2ほか)が数点出土しているが、いずれも小破片である。なお、床面下から旧石器時代の尖頭器が出土している。

3号建物跡 (第16図 図版8)

I-9 G、標高106.60～106.80m付近に位置する。北西隅を中・近世の土壌(SK-10)に壊されている。プランは、ほぼ隅丸方形と考えられるが、南壁は擾乱により壊されている。ピットは6本検出された。遺構の規模は、南北で約3.60m、東西は約3.40mほどにな

ると思われる。深さは北壁で約22cm、東壁で約15cmになる。床面は南にやや傾斜しているが、ほぼ水平である。P2～P5が主柱穴になると思われる。P1およびP6の性格は不明である。柱穴の深さは、P3およびP4が約30cm、その他は15cm～20cmになる。柱穴の径は、25cm～35cmである。1号・2号建物跡と同じく灰跡は検出されなかった。覆土には炭化物のカスや焼土の粒子が混っており、特に床面直上の層には、多量の焼土粒子が混っている。

遺物の出土は、なかった。

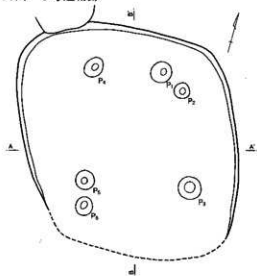
(3) 土壌

縄文時代の土壌は9基検出されている。1基を除いてI-8 GおよびH・I-9 Gの標高106.60m～107.40m付近で検出されており、縄文時代の建物跡の分布と重なる。いずれも楕円形もしくは円形のプランを持つが、主軸方向は必ずしも一定ではない。4号・5号・6号の各土壌から縄文時代早期末の条痕文系土器片が何点か出土しているのみで、遺物量は少ない。

1号土壌 (第17図 図版8)

I-8 Gに位置する。重複関係は見られない。楕円形のプランを有し、ほぼ東西方向に主軸を持つ。規模

第16図 3号建物跡



- 1 黒褐色土 締まりよし 焼土少量混じる
- 2 黒褐色土 締まりよし 焼土・炭化物多量混じる
- 3 灰褐色土 焼土多量・炭化物微量混じる
- 4 暗褐色土 炭化物少量混じる

- 柱穴1 暗褐色土 締まりよし 炭化物若干混じる
- 2 暗褐色土 締まりよし 炭化物若干混じる
- 3 黒褐色土 焼土・炭化物若干混じる
- 4 暗褐色土 締まりよし 焼土・炭化物若干混じる
- 5 黒褐色土 焼土・炭化物若干混じる
- 6 褐色土 焼土微量・炭化物多量混じる



は約1.26m×0.86m、深さは最深部で約16cmになる。立ち上がりは比較的緩やかである。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が混じる。

遺物の出土は、なかった。

2号土壌 (第17図 図版8)

I-8Gに位置する。3号土壌と重複し、3号土壌より古い。楕円形に近いプランを有し、ほぼ東西方向に主軸を持つ。規模は約1.10m×0.95m、深さは最深部で約14cmになる。立ち上がりは緩やかで、皿状に立ち上がる。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が少量混じる。

遺物の出土は、なかった。

3号土壌 (第17図 図版8)

I-8Gに位置する。2号土壌と重複し、2号土壌より新しい。2号土壌との境界際に、攪乱が入る。土壌は、円形のプランを有する。径は約0.63m、深さは最深部で約18cmになる。立ち上がりは比較的緩やかである。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が少量混じる。

遺物の出土は、なかった。

4号土壌 (第17図 図版9)

I-8Gに位置する。重複関係はない。楕円形のプランを有し、北西から南東方向に主軸を持つ。規模は約1.41m×0.97m、深さは約15cmになる。底面は平らで、立ち上がりは比較的緩やかである。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が混じる。

遺物は、縄文時代早期末条痕文系の土器片が数点出土しているが、小破片のため図示できなかった。

5号土壌 (第17図 図版9)

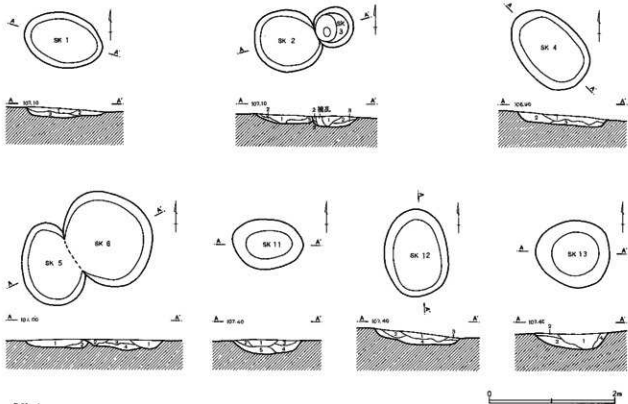
I-8Gに位置する。6号土壌と重複し、6号土壌よりも古い。楕円形のプランを有し、北北西から南南東方向に主軸を持つ。規模は約1.30m×0.95m、深さは最深部で約15cmになる。底面は平らで、立ち上がりは比較的緩やかである。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が少量混じる。

遺物は、縄文時代早期末条痕文系の土器片(第18図6ほか)が数点出土している。

6号土壌 (第17図 図版9)

I-8Gに位置する。5号土壌と重複し、5号土壌よりも古い。ほぼ楕円形のプランを有し、北西から南

第17図 1号～6号・11号～13号土壌



SK 1

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物混じる
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 3 におい黄褐色土 炭化物多し

SK 2

- 1 黒褐色土 炭化物少量混じる
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物微量混じる

SK 3

- 1 黒褐色土 炭化物微量混じる
- 2 黒褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 3 におい黄褐色土 炭化物混じる

SK 4

- 1 黒色土 焼土・炭化物多量混じる
- 2 黒褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 3 におい黄褐色土 炭化物混じる

SK 5

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物多量混じる
- 2 暗褐色土 炭化物少量混じる

SK 6

- 1 黒褐色土 炭化物多量混じる
- 2 黒褐色土 焼土少量混じる
- 3 暗褐色土 炭化物多量混じる
- 4 におい黄褐色土 焼土・炭化物混じる

SK 11

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 2 褐色土 炭化物微量混じる
- 3 灰黄褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 4 におい黄褐色土 炭化物多量混じる
- 5 褐色土 締まりよし 炭化物微量混じる

SK 12

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物微量混じる
- 2 黒褐色土 炭化物微量混じる
- 3 暗褐色土 炭化物微量混じる
- 4 褐色土 焼土微量・炭化物多量混じる

SK 13

- 1 黒褐色土 焼土多量混じる
- 2 褐色土 焼土少量混じる
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 4 におい黄褐色土 炭化物少量混じる

東方向に主軸を持つ。規模は約1.57m×1.33m、深さは最深部に約17cmになる。底面はやや凸凹しており、立ち上がりは皿状に緩やかに立ち上がる。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が少量混じる。

遺物は、縄文時代早期末・祭文系の土器片（第18図 7・8ほか）が数点出土している。

11号土壌（第17図 図版10）

H・I-9Gに位置する。重複関係はない。楕円形のプランを有し、ほぼ東西方向に主軸を持つ。規模は

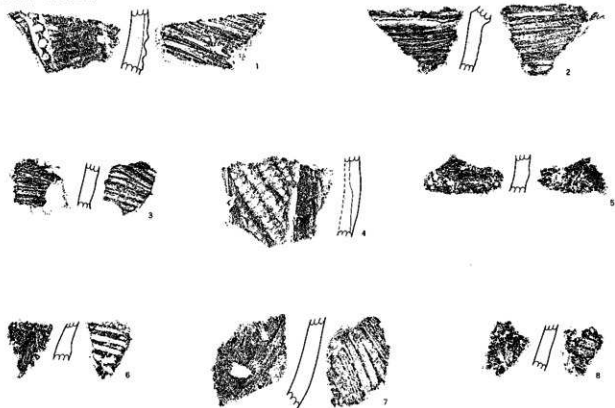
約1.15m×0.80m、深さは最深部に約24cmになる。立ち上がりは、かなり緩やかである。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が少量混じる。

遺物の出土は、なかった。

12号土壌（第17図 図版10）

H-9Gに位置する。重複関係はない。楕円形のプランを有し、南北方向に主軸を持つ。規模は約1.40m×1.00m、深さは最深部に約20cmになる。立ち上がりは、比較的緩やかである。覆土中には、炭化物のカ

第18図 縄文土器



1~3.土器集中 4.SJ1 5.SJ2 6.SK5 7・8.SK6



スや焼土の粒子が少量混じる。

遺物の出土は、なかった。

13号土壌 (第17図 図版10)

1~10Gに位置する。重複関係はない。ほぼ楕円形のプランを有し、東西方向に主軸を持つ。規模は約1.18m×1.06m、深さは最深部で約34cmになる。西側は、かなり緩やかに立ち上がるが、東側の立ち上がりは、やや急である。覆土中には、炭化物のカスや焼土の粒子が多く混じる。

遺物の出土は、なかった。

(4) 遺物

縄文時代の遺物は、1号建物跡から中期後半の土器片が出土している以外は、早期末条痕文系の土器片が合計で二十数点出土しているのみである。

第18図の1~3・図版16(上)はJ-8Gの調査区際

の深さ5cm弱の窪みから出土したものである。この窪みは、遺構というよりも自然にできた窪みと考えられる。出土した土器片は合計6点で、いずれも表裏面とも条痕が施されている。18図-1・2は口縁部に近い破片である。特に1は、条痕文の後から細隆起線が貼付され、細隆起線には連続した押捺が施される。

第18図-4・図版16(下)は、1号建物跡からの出土である。中期後半の資料である。胴部破片である。内面は剥離している。

第18図-5は2号建物跡、6は5号土壌、7・8は6号土壌からの出土である(図版16下)。いずれも表裏ともに条痕文が施されており、早期末の資料と考えられる。6および7は胴部下半の破片である。他の資料は、いずれも小さく図示に耐えないものであった。

3. その他の遺構と遺物

(1) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は4棟検出された。南側から入る谷の標高106mから10660mの斜面部に位置する。1号と2号、3号と4号の竪穴状遺構がそれぞれ重複している。いずれも遺構確認面からの掘り込みは浅く、床面も水平ではない。平面プランは、ほぼ方形である。性格は不詳である。床面直上には、焼土や炭化物の混入が見られるのが特徴である。遺物は、まったく出土していない。

1号竪穴状遺構 (第19図 図版11)

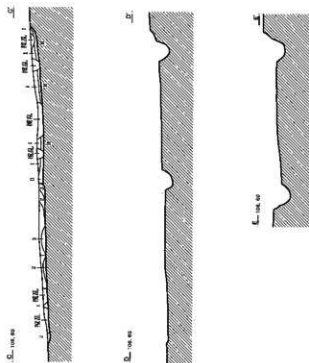
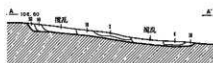
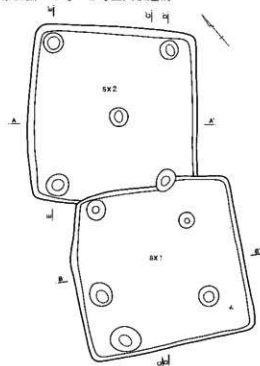
J-8 Gに位置する。2号竪穴状遺構と重複し、2

号竪穴状遺構よりも新しい。規模は約2.70m×2.55m、深さは約10cmになる。西壁寄りに3本、東壁よりに2本、合計5本のピットを有する。いずれも深さは10cm～15cmと浅い。ピットの配列は不規則であり、柱穴とは考え難い。

2号竪穴状遺構 (第19図 図版11)

I-8 Gに位置する。1号竪穴状遺構と重複し、1号竪穴状遺構よりも古い。規模は約2.80m×2.40m、深さは約10cmになる。中心と四隅に深さ15cm～20cmのピットを有する。柱穴の可能性も考えられる。

第19図 1号・2号竪穴状遺構



SX 1

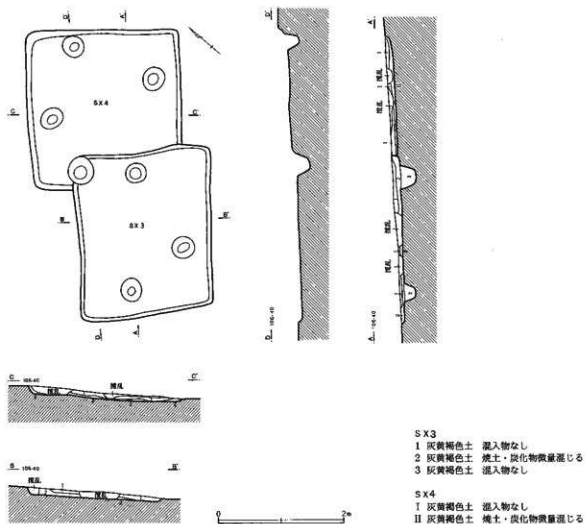
- I 褐色土 混入物なし
- II 灰黄褐色土 焼土・炭化物微量混じる
- III 灰黄褐色土 焼土・炭化物少量混じる

SX 2

- I 灰黄褐色土 混入物なし
- II 灰黄褐色土 混入物なし
- III 灰黄褐色土 焼土・炭化物微量混じる



第20図 3号・4号竪穴状遺構



3号竪穴状遺構 (第20図 図版11)

J-8・9 Gに位置する。4号竪穴状遺構と重複し、4号竪穴状遺構よりも新しい。規模は約2.55m×2.20m、深さは約13cmになる。北壁と南壁の中心に各1本ずつ、東壁のほぼ中心に1本、深さ15cm~20cmの3本のピットを有する。柱穴とは考えられない。

4号竪穴状遺構 (第20図 図版11)

I-8・9 Gに位置する。3号竪穴状遺構と重複し、3号竪穴状遺構よりも古い。規模は約2.52m×2.46m、深さは約11cmになる。西壁寄りに3本、東壁よりに1本、合計4本のピットを有する。深さは10cm~15cmと浅い。1号竪穴状遺構と同じ配列になると思われる。

(2) 土壌

中・近世と考えられる土壌は、5基検出されている

が、9号土壌としたものは擾乱層の可能性も強い。

7号土壌 (第21図 図版12)

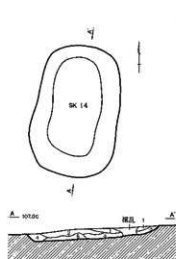
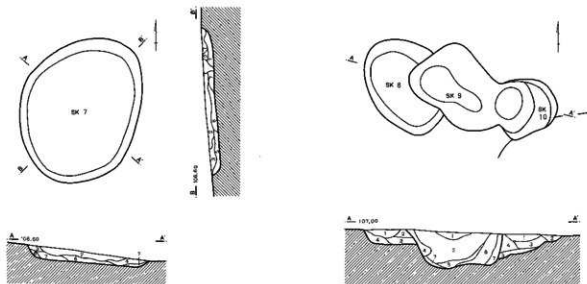
I-8 Gに位置する。規模は約2.30m×1.85m、楕円形で、深さは約20cmになる。覆土下部に焼土や炭化物が混じる。

8号・9号・10号土壌 (第21図 図版12)

I-9 Gに位置する。9号土壌が8号および10号土壌を壊している。8号の規模は約1.07m×0.87mで、楕円形、深さ約23cm。10号は径約1.01mの円形で、深さ約96cm、3号建物跡を壊している。

14号土壌 (第21図 図版13)

I-10 Gに位置する。規模は約2.05m×1.33m、楕円形で、深さは約17cmになる。覆土下部に焼土や炭化物が混じる。



SK 7

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物混じる
- 2 黒色土 炭化物微量混じる
- 3 褐灰色土 焼土・炭化物微量混じる
- 4 灰黄褐色土 炭化物少量混じる
- 5 黒褐色土 炭化物多量混じる
- 6 におい黄褐色土 焼土・炭化物微量混じる
- 7 暗褐色土 炭化物微量混じる
- 8 暗褐色土 炭化物微量混じる

SK 14

- 1 黒褐色土 炭化物微量混じる
- 2 黒褐色土 焼土・炭化物微量混じる
- 3 におい黄褐色土 焼土・炭化物多量混じる
- 4 暗褐色土 締まりよし 炭化物少量混じる
- 5 暗褐色土 焼土・炭化物多量混じる

SK 8

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物混じる
- 2 暗褐色土 炭化物微量混じる
- 3 におい黄褐色土 炭化物少量混じる
- 4 暗褐色土 炭化物少量混じる

SK 9

- 1 黒褐色土 焼土多量混じる
- 2 黒色土 ローム粒子・焼土混じる
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量混じる
- 4 黒褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 5 褐灰色土 炭化物少量混じる
- 6 灰黄褐色土 焼土・炭化物混じる
- 7 におい黄褐色土 焼土・炭化物多量混じる

SK 10

- 1 黒褐色土 焼土多量混じる
- 2 褐灰色土 ローム粒子微量混じる
- 3 灰黄褐色土 焼土・炭化物少量混じる
- 4 におい黄褐色土 炭化物微量混じる
- 5 褐色土 締まりよし 炭化物微量混じる

(3) 溝

1号溝 (第22図 図版13・14)

1号溝はA区から検出されている。この溝は、グリッドの東西軸とほぼ並行して走っているが、G-4 Gで逆への字状に曲がり、北西方向に延びて平成5年度の調査で検出された溝につながる。溝の断面形は、ほぼV字状に広がるが、溝底は狭い箱築研状を呈している。上幅は最大約1.70m、溝底の幅は約0.15mである。覆土中から江戸末から明治にかけての陶磁器が出土しており、近世の溝と思われる。

(4) 中・近世の遺物

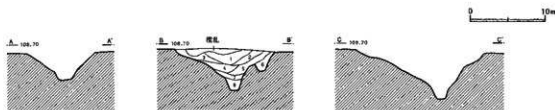
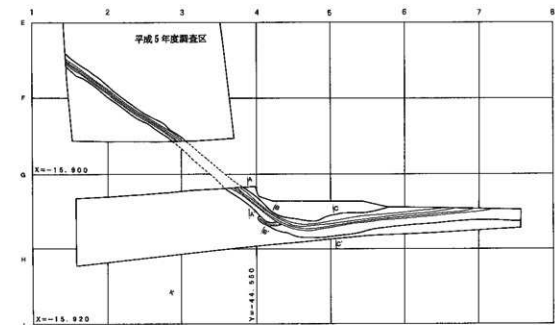
陶磁器 (第23図 図版17)

陶磁器はわずかしかが出土しておらず、図化できるものも少なかった。図版17(上)は、天日茶碗の破片である。中世末か近世初頭のものであろう。第23図1は杯、4は播り鉢である。2は陶器の碗、3は陶器の小皿、5は磁器の椀である。1および3は中世の遺物である可能性が高い。2・3・5は近世後半のものであろう。

砥石 (第23図)

第23図-6は凝灰岩製の砥石である。

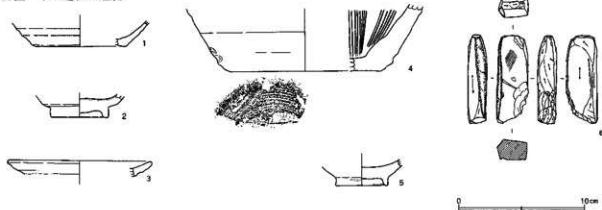
第22図 1号溝



- 1 黒褐色土 ローム粒子微量混じる
- 2 黒褐色土 混入物なし
- 3 におい:黄褐色土 崩落ロームが主体
- 4 灰黄褐色土 ローム粒子多量混じる
- 5 褐色土 ローム=ブロック少量混じる
- 6 褐色土 ローム=ブロック少量混じる
- 7 褐色土 ローム粒子少量混じる
- 8 灰黄褐色土 ローム粒子多量混じる



第23図 中・近世の遺物



V 結語

1. 旧石器について

旧石器時代の石器集中は、全部で4箇所検出された。単独出土の石器も含め、全てB区からの出土である。台地の平坦部から肩部にかかる標高約107.00m～108.00mの範囲で検出されている。ほとんどの石器が第3層（ソフトローム）からの出土である。

石器集中は大きくH-9・10G周辺とJ-13G周辺の2地点に分かれ、H-9・10G周辺は3つの集中に分かれる。第1石器集中はH-9Gの北西寄りに存在し、その南側のH-I-9Gに第3石器集中、そして、第1石器集中の東側、H-9G北東寄りからH-10Gにかけて第2石器集中が存在する。第4石器集中は、第2石器集中から約38m南東方向に離れた地点、J-12Gの東壁寄りからJ-13Gにかけて存在する。

第1・第2・第3石器集中では、いずれもチャートと黒色頁岩が石材として用いられており、第1および第2石器集中では、これにメノウが加わる。また、

H-8Gから単独で出土したナイフ形石器も、チャートが用いられている。

第4石器集中のみが、他の石器集中とは異なった石材が用いられており、ガラス質黒色安山岩の大型剥片以外は、黒曜石が用いられている。

なお、当遺跡においては、チャートは石材として一般的な素材であったと考えられ、第1から第3の各集中においても、それぞれ高い出土率を示している。

なお、平成5年度の調査で出土した剥片は、すべてがチャートであった（埴埋文1966）。

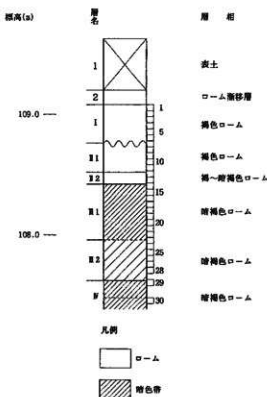
当遺跡の基本十層は第4図のとおりである。第2層がローム漸移層、第3層がソフトローム層、第4層がハードローム層、5層～7層が暗褐色ローム層になる。これを、平成5年度調査時に勝谷リノ・サーヴェイガ作成した柱状図に対比すると第2層がⅡ層（ローム漸移層）、第3層がⅠ層（ソフトローム層）、第4層がⅡ1・Ⅱ2層（ハードローム層）、第5層がⅢ1層（暗褐色ローム層）、第6層がⅢ2層（暗褐色ローム層）、第7層がⅣ層（暗褐色ローム層）、にそれぞれ該当する（第24図・埴埋文1966より転載）。

今回の調査で出土した石器は、ほとんどが、第3層の中層よりも上部から出土しており、第4層にかかるものは希である。

第1石器集中からはTOOLは検出されておらず、第2石器集中からメノウ製のスクレイパーが1点、第3石器集中からは、チャート製のナイフ形石器と尖頭器が各1点、第4石器集中から黒曜石製のナイフが1点、それに、H-8Gからチャート製のナイフ形石器が1点、合計で5点のTOOLが出土している。

器種別では、ナイフ形石器が3点、尖頭器およびスクレイパーが各1点出土している。剥片と碎片は合計57点、焼礫は合計6点出土している。なお、第4石器集中からは、焼礫が出土していない。焼礫は、出土数も少なく、いずれも小石であった。また、前回の調査

第24図 中台遺跡柱状図



(H5年度)では、チャート製の剥片が20点出土している。

飯能市域における旧石器時代の遺跡は、入間川流域および南小畔川流域に何箇所も見られる。南小畔川流域では、向原B遺跡や上ノ原遺跡から尖頭器やナイフ形石器が見つかり、当遺跡の北側に谷を隔てて隣接する屋淵遺跡からはナイフ形石器や石核、剥片などが出土している。入間川流域には、尖頭器やナイフ形石器を出土している小岩井渡場遺跡、やや下流では秩山市の宮地遺跡などが知られている。なお、高麗川流域からは、旧石器時代の遺跡は見つからない。

当遺跡は、南小畔川から直線距離で約500m南に存在するが、旧石器時代の石器集中は、南斜面に面した台地の肩部にあるため、水場から遠い特異な立地条件の遺跡といえる。

2. 縄文式土器について

中台遺跡の第2次調査においては、縄文時代の遺構として建物跡3棟、土壇9基が検出されている。遺構の大半は、標高106.60m～107.20mの台地の落ち際の浅い谷から検出された。また、調査区内の谷の最深部、標高106.60m付近で、土器の集中地点が確認された。

縄文時代の遺物の点数は少なく、建物跡や土壇の一部から縄文時代早期末の条痕文系土器が数点出土している。この他にも中期後半の土器片が数点検出されたが、ここでは早期末の条痕文系土器について簡単にまとめておきたい。

条痕文系の土器は、2号建物跡・5号土壇・6号土壇およびJ～8Gの調査区南端際のみから合計で二十数点出土している(第18図1～3・5～8)。

第18図1～3は同一個体と思われる。3点とも胎土には繊維が混じる。器壁は比較的薄く、約7～8mmになる。1には、比較的幅広い細隆起線が付けられており、細隆起線上には連続した押捺が加えられる。2は、わずかに屈曲しており口縁部付近の破片と考えられる。3は胴部破片である。5と8は、胴部破片、6・7は底部付近の破片と考えられる。5～8とも胎土中

今回の調査で、当遺跡からは石器集中が4箇所検出されている。このうち、3箇所の石器集中は、原則的にチャートと黒色頁岩を主体とする構成を示しており、さらに2箇所の石器集中では、これにわずかなメノウが加わる。また、H5年度の調査の際に検出された石器集中もチャートのみで構成されており、やはりチャートを主体に頁岩などを含む屋淵遺跡と同様の傾向を示している。これに対し、第4石器集中は、黒曜石を主体とする特異な石材構成を持っている。また、屋淵遺跡から検出された石器集中からも黒曜石は1点も検出されおらず、この第4石器集中の性格をどう捉えるかは今後の検討課題といえる。

これらの石器集中の時期については、出土層位の対比をもとに、立川ローム層の“Ⅲ層”上半とするのが妥当と思われる。

には繊維を含んでいる。

これらの土器は、広い意味での早期末条痕文系土器群に含まれる。野島式から鶴ヶ島台式にかかる時期のものと考えられる。

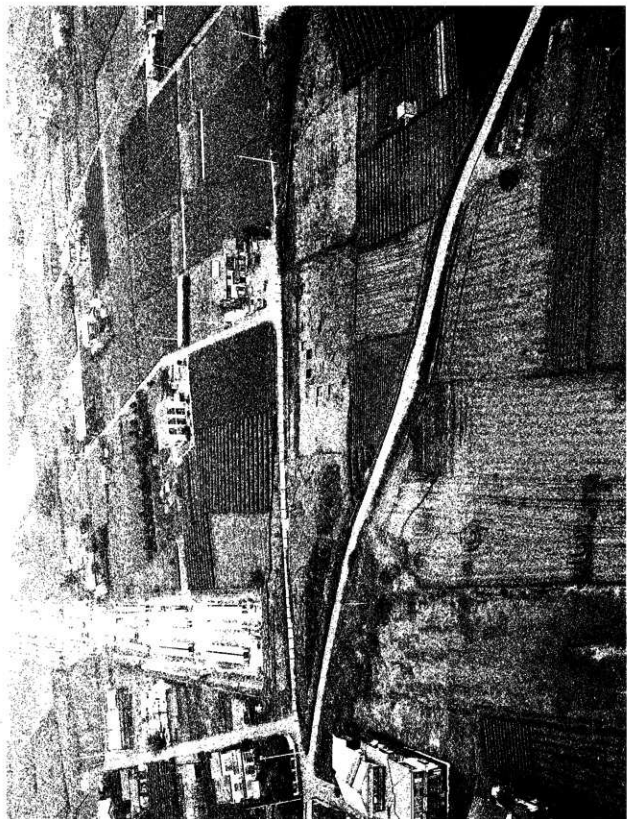
飯能地域には縄文時代の遺跡が多く存在するが、中期以降の遺跡が大半を占めており、早期の資料を出土する遺跡はきわめて少ない。中台遺跡の周辺でも早期の資料を出土する遺跡はほとんど見あたらない。わずかに、当遺跡の南方1.5kmにある池ノ東遺跡から条痕文系の土器が出土していると言う記述が見られるが(飯能市教1984)、遺物は紹介されておらず、この時期の周辺の実態は、明瞭ではない。また、当遺跡の平成5年度の調査地にも、この時期の遺物は出土していない。

飯能市における縄文時代早期の遺跡分布は、入間川流域や小畔川流域にわずかに見られるのみであり、条痕文系土器も入間川および木川の河岸段丘上の遺跡で採集されているにとどまる。したがって当遺跡の南側の斜面が条痕文系土器の分布の北端である可能性を指摘することができるかもしれない。

引用・参考文献

- 飯能市教育委員会 1979 『芦刈場遺跡』
- 飯能市教育委員会 1984 『飯能市遺跡分布調査報告書』
- 飯能市教育委員会 1984 『飯能の遺跡 (1)』 飯能市内遺跡発掘調査報告書 1
— 加能里遺跡 4 次・甲新田遺跡・前原地遺跡 2 次・池ノ東遺跡・中原遺跡—
- 飯能市教育委員会 1985 『飯能の遺跡 (2)』 飯能市内遺跡発掘調査報告書 2
— 加能里遺跡第 5 次・池ノ東遺跡第 3 次・張摩久保遺跡第 6 次・張摩久保遺跡第 3 次調査—
- 飯能市教育委員会 1986 『飯能の遺跡 (3)』 飯能市内遺跡発掘調査報告書 3
— 堂前遺跡第 1 次・2 次・3 次—
- 飯能市教育委員会 1987 『飯能の遺跡 (6)』 飯能市内遺跡発掘調査報告書 4
— 堂前遺跡第 4 次調査・張摩久保遺跡第 7 次調査 他—
- 飯能市教育委員会 1991 『飯能の遺跡 (11)』 芋久保遺跡 (第 1・2 次) 発掘調査報告書
- 飯能市遺跡調査会 1991 『池ノ東遺跡第 1 次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書 3
- 飯能市遺跡調査会 1991 『栗屋遺跡第 4 次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書 5
- 飯能市遺跡調査会 1991 『栗屋遺跡第 3 次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書 6
- 飯能市教育委員会 1992 『飯能の遺跡 (12)』 一下川崎向原遺跡第 1 次調査—飯能市内遺跡発掘調査報告書 9
- 飯能市教育委員会 1993 『飯能の遺跡 (15)』 株木遺跡 (第 1 次)・旭原遺跡 (第 1 次) 発掘調査報告書
- 飯能市遺跡調査会 1993 『堂ノ根遺跡第 1 次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書 8
- 飯能市遺跡調査会 1994 『加能里遺跡第 6 次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書 10
- 日高町教育委員会 1991 『若宮—第 11 次調査—・東原—第 3 次調査—』 日高町埋蔵文化財調査報告 第 17 集
- 日高市史編集委員会・日高市教育委員会 1997 『日高市史』 一原始・古代資料編— 埼玉県日高市
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995 『向山/上原/向原』 一首都圏中央連絡自動車道線関係埋蔵文化財発掘調査報告—Ⅳ— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 155 集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995 『西久保/金井上』 一首都圏中央連絡自動車道線関係埋蔵文化財発掘調査報告—Ⅴ— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 156 集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996 『八木上/八木ノ八木前/上広瀬北/森坂北/森坂』 一首都圏中央連絡自動車道線関係埋蔵文化財発掘調査報告—Ⅷ— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 165 集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996 『栗屋/屋淵/中台』 一県道飯能寄居線関係埋蔵文化財発掘調査報告— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 171 集

写真図版



遺跡遺景 (航空写真)



遺跡全景（東より）



遺跡近景（西より）



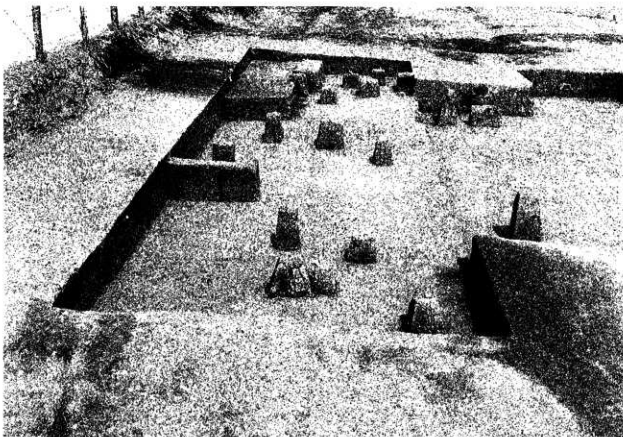
遺跡近景 (東より)



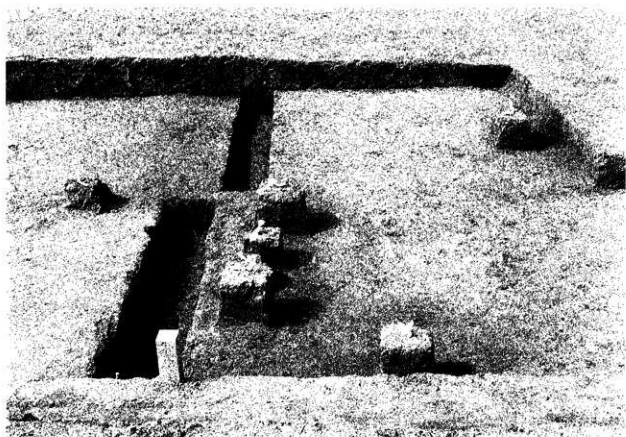
基本土層断面



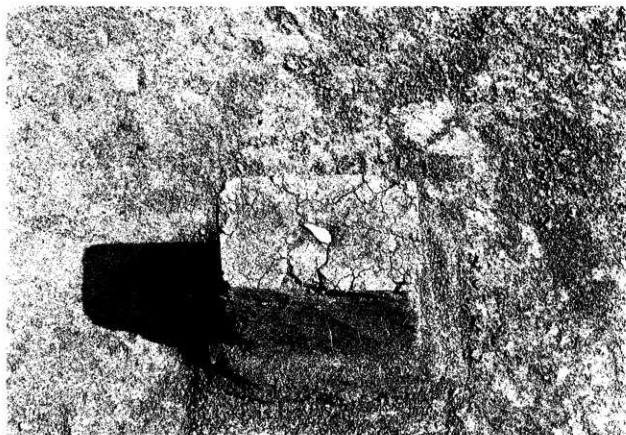
第1・第2・第3石器集中



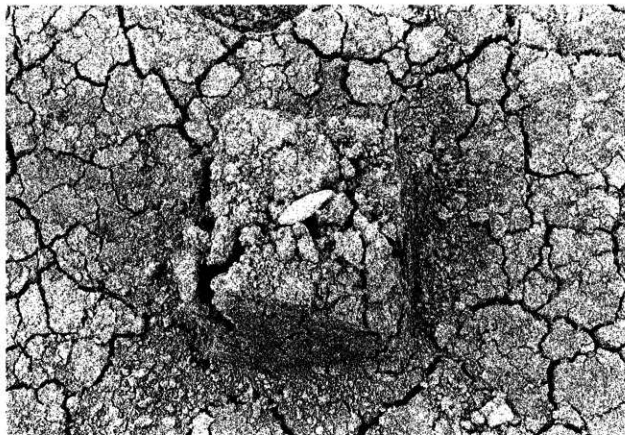
第1・第2石器集中



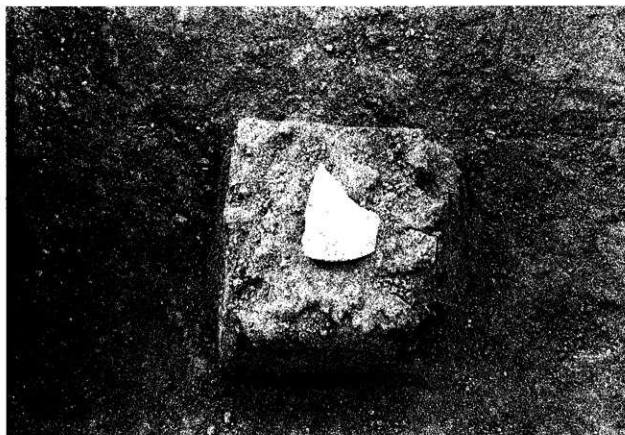
第4石器集中



ナイフ形石器出土状況 (H-8)



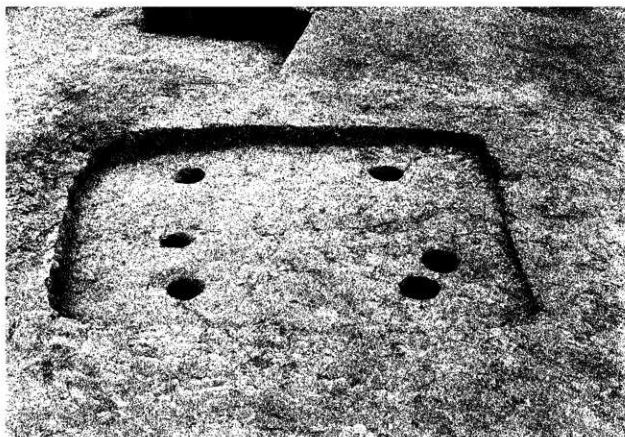
ナイフ形石器出土状況 (I-9)



大型剥片出土状況 (J-13)



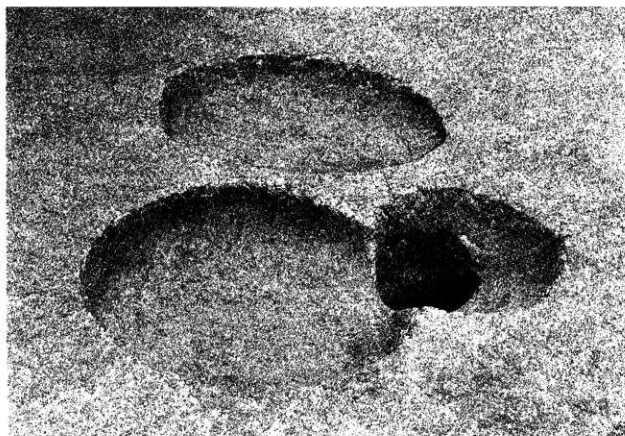
第1号建物跡（南より）



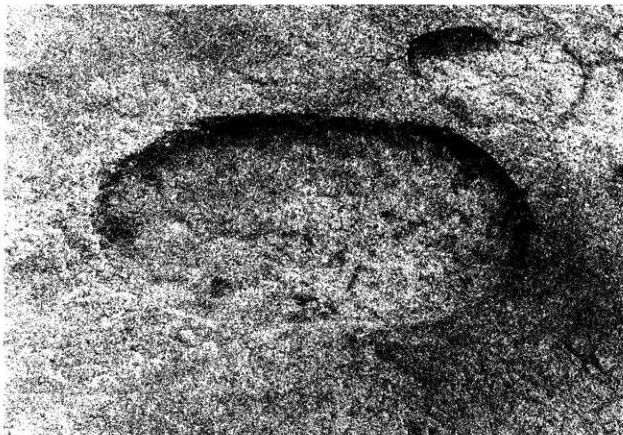
2号建物跡（西より）



3号建物跡 (南西より)



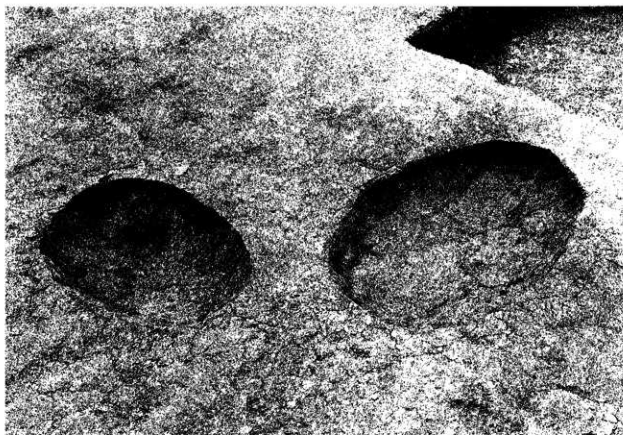
1号・2号・3号土壇 (南より)



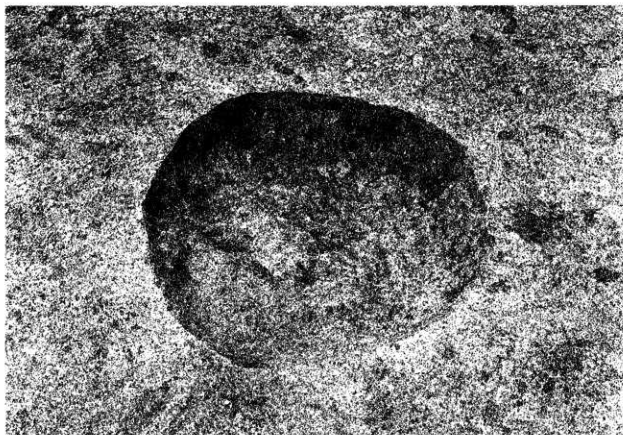
4号土壙 (南西より)



5号・6号土壙 (南より)



11号・12号土塊（南東より）



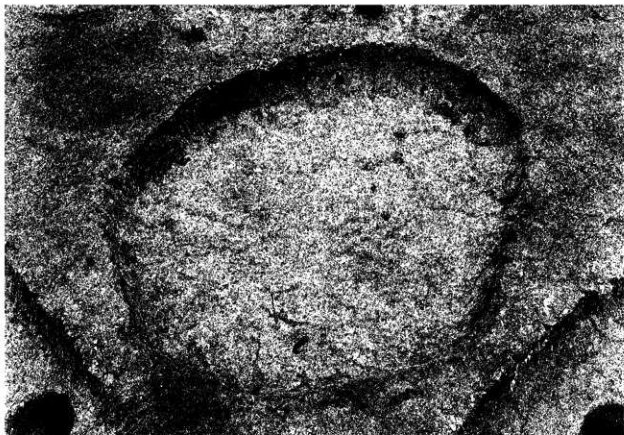
13号土塊（南より）



1号・2号竪穴状遺構（東より）



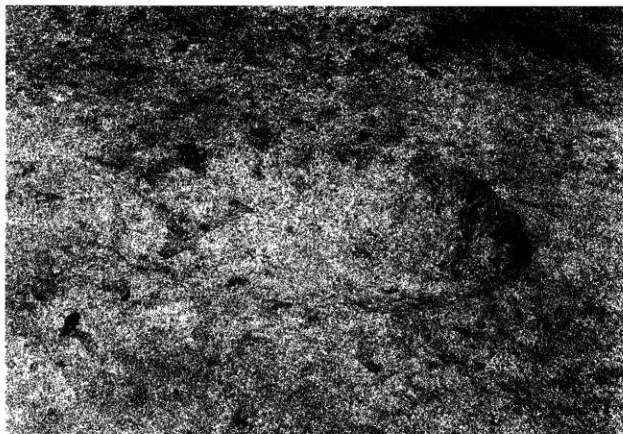
3号・4号竪穴状遺構（東より）



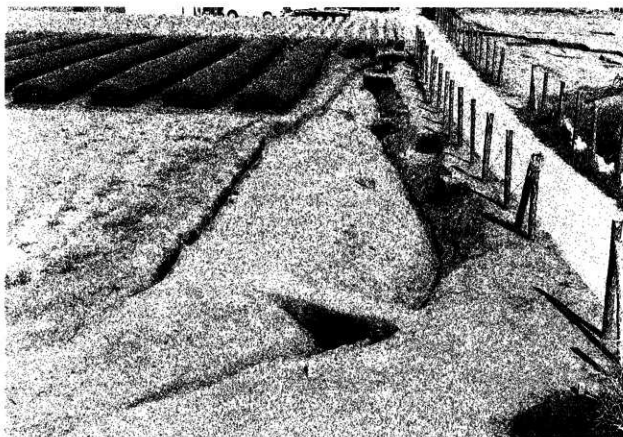
7号土塊 (南より)



8号・9号・10号土塊 (南より)



14号土塊 (西より)



1号溝 (西より)



1号溝 (南西より)



1号溝 (東より)



第10圖-1

第10圖-2



第10圖-3

第9圖-1



第7圖-1・3

第7圖-2



第13圖-1

第13圖-2



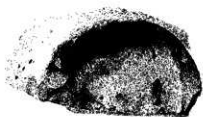
縄文土器



縄文土器



近世陶器



近世陶器

報告書抄録

ふりがな	なかだいいせき							
書名	中台遺跡							
副書名	一般国道299号関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	第二次							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第202集							
著者氏名	小野美代子							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台四丁目4番1							
発行年月日	西暦1998(平成10)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
ふりがな 中台遺跡	埼玉県 飯能市大字 及柳字上晒台 1317-3番地	11209	008	35°51'22"	139°20'23"	19950701 ～ 199500831	4,000	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中台遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 中・近世	石器集中4 建物跡3 土塋9 竪穴状遺構4 溝1 土塋5	ナイフ形石器 剥片 縄文土器 中世陶器 近世陶器 磁石				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第202集

飯能市

中台遺跡

一般国道299号関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成10年3月14日 印刷

平成10年3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台四丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955

印刷／金井印刷工業株式会社